

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 1 日現在

機関番号： 14101
 研究種目： 研究活動スタート支援
 研究期間： 2011 ～ 2012
 課題番号： 23830032
 研究課題名（和文） 実践的視点からみる幼児の時間意識とその社会的機能についての検討
 研究課題名（英文） Examining the social function of the temporal recognition in early young children from the practical point of view.

研究代表者

吉田真理子（YOSHIDA MARIKO）
 三重大学・教育学部・講師
 研究者番号： 30609178

研究成果の概要（和文）：本研究は、実験および観察を通して、「子どもが過去や未来への時間意識を獲得する発達プロセス」を明らかにすることが目的であった。その際、本研究では実践的視点をふまえ、主に次の3点を明らかにした。すなわち、1）視覚の手がかりなしで過去の出来事の順序を想起する能力、2）視覚の手がかりなしで未来の出来事の順序を想像する能力、3）時間意識の社会的機能として子ども同士の協同活動、である。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was clearing the developmental process of temporal recognition in early young children. The result suggested three points; 1) the ability to remember one's past in order without any visual cue, 2) the ability to plan one's future without any visual cue, 3) the cooperative activities as the social function of temporal recognition.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2011 年度	700,000	210,000	910,000
2012 年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野：保育内容、発達心理学

科研費の分科・細目：社会科学

キーワード：時間、過去、未来、メンタルタイムトラベル、記憶、予測、自他関係

1. 研究開始当初の背景

（1）幼児期における「時間意識の発達プロセス」の解明

人が、自分自身の過去を振り返り未来を想像する能力は、人の社会・文化の発展に大きく寄与してきたと考えられており、近年注目されている（「メンタル・タイムトラベル」（Suddendorf & Corballis, 1997））。特に、

このような人の時間意識への探求は、昔から現在に至るまで、発達心理学だけでなく脳科学、比較認知科学、生理学、哲学、社会科学、物理学など、幅広い分野にわたって研究が進められてきた、壮大なテーマでもある（e.g., Tulving, 2005; Suddendorf & Corballis, 2007; Iyengar, 2010; 一川, 2008; 木村, 1982）。したがって、時間意識が、ヒトの固体発生においていかに獲得されるのかとい

う発達プロセスを明らかにすることは、多方面にわたる時間研究に、新たな視点を提供するといえる。

(2) 実践的視点をふまえた研究の展開

過去を意識できるようになる意義の1つは、これまでの経験や体験を反省し、それを次へ活かすことができるようになることである。そのような能力は、自閉症のような発達障害をもつ子どもにとって難しいことが指摘されている(熊谷, 2005)。さらに現在、保育や幼児教育の現場で現在歌われている「自己肯定感」も、これまでの自身の過去を肯定的に振り返られるかどうかと密接に関連すると考えられる。したがって、過去への意識を、単に「過去の体験を覚えているかどうか」といった記憶面だけではなく、それがいかに現在の心や行動に関連しているかといった視点からも、実験的検討をおこなう必要がある。一方で、未来への意識の発達については、その実証的証拠の少なさが指摘されてきた(吉田, 2011)。しかしながら、未来を想像する能力は、子どもが自身の将来を選択・決定していくための土台であり、そのような能力の発達プロセスを明らかにすることは子どもの権利や自己決定を保障することにつながる。

(3) 社会的機能という視点を取り入れた研究の発展

以上のように、時間意識の獲得は子どもにとって大きな意味をもつが、それは個人にとっての利益だけにとどまらない。過去や未来を、自分以外の他者と共有するという能力は、人と人の長期的な関係(例:「昨日一緒に遊んだから、また一緒に遊びたい」)に貢献すると考えられる。特に、コミュニケーションが苦手な発達障害をもつ子どもにとって、コミュニケーション場面を越えた長期的関係の形成は、人とつながるための重要な側面である。したがって本研究では、時間意識をこのような自他関係から捉え、その社会的機能を検討する。

(4) 国内外の研究動向及び位置づけ

このような時間意識の発達は、研究としても実践においても重要な機能であるにもかかわらず、国内での研究はまだあまり為されていない。海外では、新たなアイデアを含む実験的検討が年々増加しつつある(e.g., Atance & O' Neill, 2005; Suddendorf & Corballis, 2007; Lemmon & Moore, 2007; Clayton, 2003)ものの、国内においては、特に乳幼児を対象にした研究は、まだ数少ない(上原 2006 ; 仲 2003; 吉田, 2011)。それにもかかわらず、その重要性は多くの研究者が指摘しており(e.g., 木下, 2005; 浜谷, 2005)、先駆的な研究として発展が望まれている。

2. 研究の目的

本研究は、実験および観察を通して、「子どもが過去や未来への時間意識を獲得する発達プロセス」を明らかにすることが目的であった。その際、本研究では実践的視点をふまえ、次の3点に着目した。すなわち、1) 過去への時間意識、2) 未来への時間意識、3) 時間意識の社会的機能である。

3. 研究の方法

(1) 過去の想起の発達

幼児期(特に3歳~6歳)における過去の想起の発達プロセスについて、考案した新たな実験課題(「落とし物課題」)を通して明らかにする。落とし物課題では、「実際に、子どもが部屋を移動する間に特定のアイテム(Key アイテム)を落とす」といった場面を意図的に設定する。その後、子どもがKey アイテムを探すときに、「自分が移動してきた場所をいかに想起しながら探すか」に着目することによって、より日常に近い自然な場面の中で過去の想起の発達を明らかにする。

(2) 未来の想像の発達

上記の「落とし物課題」に未来質問を追加することによって、「落とし物をした」という失敗経験をふまえ、未来で再びそれが起こらないように見通しをもって予防対策できるようになる時期はいつ頃からかを明らかにする。

(3) 時間意識の社会的機能

時間意識の社会的機能を明らかにするために、実験と観察を実施する。

まず実験においては、従来のアイテム準備課題(e.g., Atance & O'Neill, 2005; Atance & Melzoff, 2005)を応用し、“自己の”未来のために必要なアイテムを選ぶ場合と、“他者の”未来のために必要なアイテムを選ぶ場合を比較する。

次に観察においては、3~5歳児の縦割りクラスにおける協同活動の縦断的観察を通して、日常生活における過去や未来の共有についてエピソードを収集する。

4. 研究成果

(1) 「落とし物課題」を用いた実験による、過去及び未来の認識の発達

本実験の目的は、子どもが実際に体験した出来事の順序性をいかに想起し、そしてそれに基づいたプランを立てることができるようになるのはいつ頃からかを明らかにすることであった。そして、本研究では落とし物課題を用いた実験を通して、次の3点が明らかとなった。

第一に、本研究では、過去の出来事の順序に関する想起については年齢差がみられなかった。これは先行研究 (McColgan & McCormack, 2008) においても、出来事が3つの場合は4歳頃から過去の出来事の順序を考慮できるという結果であった。ただし、先行研究と違い、本研究では4歳児の中で正答したものは半数にも満たなかった。McColgan & McCormack が示したように、4歳児のパフォーマンスは考慮すべき出来事の数によって左右されることを考えると、本研究ではやはり先行研究のように視覚的な手がかりがなかったため、4歳児にとってはやや困難であったのかもしれない。今後は、子どもが時間的順序を想起する際に、空間関係を利用した視覚的な手がかりをいかに使えるようになるのかについて明らかにする必要があるだろう。

第二に、未来の出来事の順序に関するプランについてもまた、McColgan & McCormack では4歳から5歳にかけて可能になるという結果とは異なり、年齢差はみられなかった。ただし、4歳児と違って5、6歳児は半数以上が正答した。したがって、本研究では先行研究とは違って視覚的な手がかりがなかったために、5、6歳児の正答率が低くなった可能性がある。したがって、この結果についてもまた、今後は視覚的な手がかりによる影響を確認する必要があるだろう。また未来については、6歳児のみがそのプランを出来事の時間的順序に言及しながら説明できた。これは、順序について自覚的に考慮できていることを示唆する。これは、言葉の発達が時間認識の前提条件であるという主張に反論する結果といえるかもしれない。また、年齢によって言語が占める役割の大きい時期とそうでない時期がある可能性もあるだろう。

第三に、本研究では、過去と未来のパフォーマンスに関連はみられなかった。過去の順序を正しく想起できるからといって、それがすぐに未来のプランにはつながるわけではないと考えられる。また、過去の課題と未来の課題に決定的な違いがある。それは、過去の場合はカンガルーの写真をとった時点よりも未来の出来事を考慮させているのに対して、未来の場合はカンガルーの写真をとるという時点よりも過去のことを考慮する必要がある。すなわち、前者は時間の進む方向へ順行した思考であるのに対し、後者は時間の向きとは逆向きになる。つまり後者のような予防は、より難しいことが示唆されており、これについても今後の更なる検討が期待される。

今後は、このような現在の自己の視点から離れるようになることと、他者の時間的視点に立つこととの関連を明らかにしていく必要

があるだろう。

(2) 「アイテム準備課題」を用いた実験による、自己と他者における時間認識

本実験の目的は、子どもが自己の未来を想像することと、他者の未来を想像することに、違いはみられるのかどうかを明らかにすることであった。

実験は、4歳児30名、5歳児30名、6歳児30名を対象に実施した。子どもが選択したアイテムについては現在分析中である。

(3) 協同活動の縦断的観察による、自己と他者の時間の共有

本観察の目的は、協同活動を通して、日常場面で子どもたちがいかに過去や未来を共有するかを明らかにすることであった。

観察は、縦割り保育を取り入れている幼児クラスを対象に、約半年間計19回実施した。主な結果は次の3点である。

第一に、子どもたちが参加する活動が、①「明確な場合 (当番活動や全体活動など)」, ②「曖昧な場合 (製作やゲームなど)」, ③「創造する必要がある場合 (ごっこ遊びなど)」によって、子どもたちの協力活動への参加の仕方が異なった。特に、①「活動の目的が明確な場合」に、より多く協同活動がみられた。この結果から、活動の目的が明確なものほど、子どもたちは自他間で未来を共有する傾向が強くなることが示唆された。

第二に、3歳児は協同活動の中で、目的に向かう行動をする方が、そうでない行動よりも多くみられた。その際、自分自身で判断して動くというよりも、他者の行為をみたり、同調したり、模倣をするなどして行動をおこなうことが多かった。一般的に、3歳児は未来を想像することが難しいといわれているが、他者と一緒におこなう活動が、未来を想像するための足場かけになった可能性がある。ただし、単に行動上は他者の模倣をして目的にそっていたとしても、実際はまだ未来を認識していなかった可能性がある。したがって、今後は、事例をより詳細に検討・分析していく必要があるだろう。

第三に、3歳児を対象に、上記のうちの2つの要因、すなわち「活動の目的」と「自ら行動したか他者に影響された行動か」の関連をみた。その結果、活動の目的が曖昧であった場合、目的に向かった行動をした事例すべてにおいて、他者の行動に影響されていることがわかった。すなわち、子どもは他者の様子を見ることによって、未来への想像が刺激されたことが示唆される。また、活動の目的が創造する必要のあった場合、子どもは意外にも、目的に向かう行動をした際の約半数の事例において、自ら行動した。すなわち、活動の目的を創造する場合は、活動の目的が曖

昧である場合と同様、一見未来を想像することが難しいと思われるが、自らが主体となった活動の方が、より未来を想像しやすいのではないかということが示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

1. 吉田 真理子 (2013) 幼児期における出来事の順序に関する想起とプラン, 三重大学教育学部紀要, 64, 357-362.

2. 吉田 真理子 (2011) 幼児期のメンタルタイムトラベルに関する研究の展望: 時間と自己, 心理科学, 32, 63-81.

[学会発表] (計 3 件)

1. 吉田 真理子 (2012, 3, 10) 幼児の時間意識と出来事の順序性－「落し物課題」を用いて－. 発達心理学会第 23 回大会, 名古屋国際会議場

2. Yoshida Mariko (2012, 7, 10) Preschool Children's Ability to Understand that Personal Experiences are Representational. The 22th Biennial Meeting of the International Society for the Study of Behavioural Development, Edmonton, Canada.

3. Yoshida Mariko (2011, 8, 1) Preschool children's understand of the future thinking based on personal experience. The Pacific Early Childhood Education Research Association 12th Annual Conference, Kobe, Japan.

6. 研究組織

(1)研究代表者

吉田 真理子 (YOSHIDA MARIKO)
三重大学・教育学部・講師
研究者番号: 30609178

研究協力者

藤原 理恵 (FUJIWARA RIE)
三重大学・教育学部・学生